佛典中ノ醫術

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 巖英 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38528

金澤醫學專門學校十全會雜誌第四十八號附錄

佐藤巖英氏編著

佛典中の醫術

佛典中の醫術

客歳十一月二十四日西町本願寺廟所に於て本校解剖遺體追吊會あり、第九師團軍隊布教師佐藤巖英氏一場の法語を試み遺族は固より教授學生等各參拜者をして蕭然として森嚴感謝の念に遺德廣大死して猶餘榮あるを覺ゐしめ、特に吾人仁術に從ふ者をして進んて解剖臺上の人たるへきを深く思はしむ、式後長へに其英靈を偲ひ其餘德を欽仰せんか爲に誌上一文を草せられん事を乞ひしに、折から京地に榮轉せらるへき氏の後日期を得て之を果さんことを快諾せられたり、越ゐて今春吾れ測らず病床仰臥の人とゐれるも幸に季、暑に入ると共に輕快に赴きしを以て書して吾意を滿さんことを希ひしに需に應して直に左の一篇を寄せられたり、篇中古來口に四百四病を稱へつゝ由て來る所を知らざるの人は即ち其基く所を知るべく、故を溫れて新しきを知らんと思ふの士は更に向上の心を起すへし、只題するに佛典中の醫術とあるは聊か語弊ふきにしもあらず寧ろ佛教醫觀と稱する方可ふらんも、今則ち多少字句の修正を加へ魯魚の謬を正したる外全く原文に從ひて之を書寫し、特に師小川勝陳先生の助力と宮田雜誌部長の好許により附錄として本誌に揭くることゝせり、一言茲に此が事由を明にすと云爾　（明治四十年盂蘭盆會　於金澤病院　八田智証識）

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

序言

著者從來佛典中の醫術として講話せしこと數回、其の初め京都醫學校内に設けられたる佛教青年會に於て佛教には醫學上營養分を豐有すと云へる肉食を斷禁する爲め眞面目なる僧侶の病院に入るときは之に肉食を勸むるも佛制として食せざる爲治すべき病をして治することを得さらしむることあり何とか善き方法はなきやとの内科醫の質問に對して「佛教の肉食論」と云へる講話を爲したることあり、又尾州常滑に開かれたる大日本佛教青年會の夏期講習會に於て愛知醫學校生の出席多かりし爲「印度の三大醫中の一人耆婆の傳」を講じ、或は能州和倉溫泉

場に開かれたる講習會には「佛典中の衛生談」を述べ且つ「佛典中の清潔法」と云へる題下に溫泉の事を論じたり、又曾て金澤衛戍病院長たりし市川軍醫正の北陸は佛敎盛なる爲屍體を大切にし解剖を厭忌する癖ある結果屍體解剖より得る知識を此北陸の醫學界より世界に貢献すること難しとの談話に感じ所々に「佛敎の屍體觀」に就て演せしことあり、即ち三十四年九月金澤醫學專門學校が城東卯辰山上に於て屍體解剖者の爲に追吊會を營まれたる際並に昨年十一月西町存如上人廟所に仝追吊會を催されたる際各一場の講話を爲せしか如き其一なり、其他或藥師堂の開堂式に招かれ講話を乞はれければ祈禱禁厭は除病の法にあらずと云へる題下に迷信と醫術、病氣と醫師、病氣と醫藥、宿作外道と因果說との別を論せしことあり、又戰時の醫學と看護の心得に就ては日露之役屢旅順、奉天の野に衛生隊、野戰病院の爲に說法し、女性と看護に就ては金澤將校婦人會員の爲に「シスタドーラ」孃と光明皇后と云へる講話を試みしことあり、而も由來之が腹案を造りしことなく亦之を筆に留めしこともなかりき、偶昨冬金澤を辭する際八田兄より解剖屍體追吊會に於ける講話に補足して吾人醫士の爲に佛典中の醫觀として一篇を物せよとの依囑を受けたるも責任を以て筆を執らんと欲せば多少參考書に就て考證を正すの要あり、然るに身布敎に忙しく東奔西走去りて書窓に一日の閑なく思の儘多數經典を比較對照するを許さざるものあり、心ならずも依囑を空しくして打過きたるに頃日兄書を致して春來久しく病床に在り人生又期し難しかねて賴みたきつる佛敎中の醫觀願くは知らまほしとの語覺にず腹を抉くるの感あり、乃ち曾て自ら手記せしものを寫し佛典中の醫術と題し机下に呈することゝなしたり、毫も組織を立てず又文をなさず、其の組織其の配合に至りては二千數百年を閱せし印度の醫術及佛典中の醫術なれば近世醫學書の体裁に基き宜しきに順つて配合塩梅せられんことを望む

第一　佛典醫術研究の必要

我邦は佛教國なり、故に今日此佛教地に醫を以て立たんとする者は醫療を施さんとするに當り患者の風俗、人情、習慣等を知るの要あるか如く、信仰特に其醫術に關係あるものを研究するの要あるはまた論を俟たざる所なり

而して世には彼の眼病者か頻須留尊者の眼目を撫てゝ前きに撫てし人の黴菌を採り來り或は下病患者か平癒を佛に祈りて香水(腐れ水)を頂き反つて重症に陷るの迷信あらん、又人の壽命は前生より定まれるものなれば病に醫師を迎へ醫藥を飲むも壽命即天壽命數なれば死す仮令病みて醫師なく醫藥を服せさるも天壽あり命數盡きされば則ち死せすと云へる邪因果說を信する宿作外道の人もあらん

此等愚なる迷信に對して其昔佛は如何に福音を垂れしかを究むるは醫師として洵に忽にすへき問題にはあらさるへし

蓋し佛典中の醫術か學理として技術として決して進歩せるものとは云ひ得べからずとするも其の醫師として病人に接する精神其看護者として患者に接する精神に至ては就て學ふへきもの尠少ならさるを信ず、且つ又佛教を信し佛制を守るの故を以て學理上營養分と認むる肉食を勸むるも此を取らさるか爲速に平癒せしむるを得す却て醫師其人の眞價を謬り其盛名を惡くすることあるか如きを保すべからず、此等に向て佛典中の醫術を知るは全く徒勞の業にあらさるべく予か研究の必要を稱ふる所以亦此に在り

第二　佛典中の醫術を說く緒論

予曾て佛教醫方明論を著さん爲に其稿を立てんとして止みたることあり今其緒論を匝底に探り得たるを以て玆に又緒論として之を掲く、乞ふ其心して讀み給はんことを

佛教醫方明論

第一章　緒論
第一節　發端
第二節　印度に於ける當時の思想及狀態
第三節　印度に於ける醫方明
第四節　醫方明と諸學との關係
第五節　醫方明と諸學との起原

第一節　發端

佛教醫方明論とは佛典中の醫學を論せんとするものなるが、そも醫學は人生のあらん限り必須の學なり人生に免るべからざる病苦に對する救生術なり故に時の古今を問はず洋の東西を論せず何れの時にも何れの處にも行はれたる術なり學なり、而して釋迦牟尼世尊は世界の大救世主なり大救世主なるを以て人生の病苦を見て之を救はんが爲に亦此醫方明を說けり、然れ共釋迦牟尼世尊の說ける醫方明は或は廣義に解せられ或は狹義に解せらる、若し廣義に解するときは釋迦一代五十年間の說法は總て是れ應病與藥の福音なれば之を醫方明と云ふも妨けさるべし、然れとも斯く廣義に解する醫方明は今說かんと欲する所にあらず、先つ說かんと欲する醫方明は佛教の經典中處々に散說せる所謂通常一般の人か醫學と認むる狹義のものにして病に應じて施す所の醫學を論せんとするにあり

此醫方明を論せんとするに當り醫方明なるものゝ說明を佛典中に求むるに西域記には

醫方明禁呪、閑邪、藥石、針艾

と云ひ明燈抄には

醫方明謂二藏中、畧辨三病狀病因除病令レ病不レ起二四種善巧一名二醫方明一

と云ひ三藏法數には

醫方即醫療之方法也、謂世間種々病患、或癲癇蠱毒、四大不調、鬼神咒詛、寒熱諸病、皆悉曉了通達對治故曰二醫方明一

と云へり以て醫方明の定義解釋を知るに足るべし

第二節　印度に於ける當時の思想及狀態

佛典中に現るゝ總ての說は釋迦か始めて說きたるものか又は釋迦以前の印度の神話より出てたるものにあらざるかを研究するは學佛者たるものゝ忘るへからさることなり、故に今醫方明を論せんにに釋迦始めて說きたるものか將た釋迦以前より既に行はれたるものならざるかを問はさるべからず、此を問ふ宜しく其當時の思想及狀態を檢するの要あり、蓋し當時の思想及狀態を檢するに印度の風俗習慣と云ひ印度人の總ての思想は皆印度の神話より形ち造らるゝなり、今此を風俗に見るに印度の人民には由來四種族の階級制あり曰く波羅門種、刹帝利種、吠奢種、戍陀羅種是なり

其中波羅門種とは如何なる種族なりやと云ふに西域記には之を

一波羅門種＝淨行也守レ道居レ貞潔白二其操一

と解して四種族中の第一位に置き衆人の尊敬を受くる種族とす、斯の如く此種族か各種族中の第一位に置かれ衆人の尊敬を受くるに至れるは其源を神話に發すれはなり、飜譯名義集には此事に關しては波羅門と云ふを

應法師云、此訛畧也、具云(サニ)婆羅賀摩拏、義曰承習梵天法者、其人種類自云(カラフ)從梵天口生、四姓中勝、獨取梵名、唯五天竺有、餘國即無、諸經中、梵志即目此名、正翻淨高、是梵天苗裔也

と釋す、是に由りて見れは波羅門は梵天の口より出てたる種族として梵天の苗裔として四種族中の第一位にあり、而して此種の司る處は梵天の法を承習するにあるが維摩經註疏には

婆羅門、秦言外意、其種別有經書、世々相承、以道學爲業、

とあり以て波羅門種か宗敎及學術を司る種族なるを知るべし

次に第二を刹帝利種と云ひ王家の種族、第三位を吠奢種と云ひ商家の種族、第四位を戍陀羅種と云ひ農家の種族なり

此四種の別は恰も我邦の皇別、臣別、蕃別、の如く又現今の皇族、華族、士族、平民の別に稍似たり、然れ共一の特異とする所は印度にては宗敎を司る波羅門種を最上位に置くも皇族たる刹帝利種を第二位に置くに在り、斯く印度にて宗敎家を第一位に置くの結果國民が此種に對して尊敬を拂ひ其司る宗敎に對して敬慕の念を高むるは當然の事と謂はざるを得ず、而して今論せんとする醫方明も亦其源を神話に發するの結果國民一般に神聖なる術として敬するに至れり此を以て醫術を仁術と稱するに至るも故なきに非さるなり、即ち印度當時の思想及狀態は總て神話より出てたるものは神聖なりと敬し且つ慕ひたると同時に醫方明も其起源神話に出てたるを以て深く敬せられたるを知るに足らんか

第三節　印度に於ける醫方明

今茲に印度の醫方明として說く所は釋迦以前に行はれたる醫方明を說くに在り、始めて印度に醫術の行はれたるは古き事にして其源韋陀(毘陀)の神話に出てしものにして彼等の間には「アシウン」なる神を以て病を驅るの恩人と信し之を拜して除病を祈るに或は犧牲を供へ或は呪文を唱へたりと云ふ、且つ史の傳ふる所によれば神意のみによりて病を除くとのみ信せず熱病患者か冷水を以て身體を拭ひ或は植物を藥用に供したりと云ふ、其外解剖の知識の如き神に供ふる犧牲を屠ることによりて多少開かれたるものなりと云へり、斯く釋迦以前に多少醫術の行はれたるを佛典中に探るに瑜伽論に曰く

一切外道略三三種一一者因論二者聲論三者醫方論

と以て佛敎以外にも醫方明の行はれたるを知るべきなり、尙佛敎以外に醫方明の行はれたるを說くものは七帖見三大部補註、梵漢對映集等なり

此等の書により佛敎以外に醫方明の存せしことを知るべく、韋陀論(毘陀論)によれば釋迦以前醫方明の行はれたりしを知るに足る、そは韋陀論なるものは四韋陀と云ひ名義集及三藏法數等により見るに毘陀四種の中醫方明を說くものは

一、阿由毘陀、華(支那)言二方命一亦曰レ壽、謂〃養生繕性之書也、二、殊夜毘陀、謂〃祭祀祈禱之書也、三、婆摩毘陀、謂禮儀占卜兵法軍人之書也、四、阿達婆毘陀、謂異能技數梵呪醫方之書也

「因に西傳の毘陀は」

阿由＝Rig-Veda

殊夜＝Yajur-Veda
婆摩(三摩)＝Sama-Veda
阿達婆＝Atharva-Veda

此に據りて見れは醫方明は第四「アダルヴァ、ベダ」に載する所なるを知るべし、西域記亦此說なるも、玄應音義第十九卷(十九丁)には

一、名二阿由一此云レ命、謂二醫方諸事一、二、名二夜殊一謂二祭祀一也、三、名二婆摩一此云レ等謂二國儀卜相音樂戰法諸事一、四、名二阿闍婆拏一謂二呪術一也

とありて第一阿由論中載する所とせり、何れにするも兎に角四千年以前の韋陀論中に醫方の目を擧けて多少の說明を爲すを見れは釋迦以前一千有餘年の古より既に業に印度的醫術の行はれたるを見るべく、之を梵天の神話より出てたるものとすれば古き時代より聖き仁術として人類に敬意を拂はれたる業なるをも知るに足るべし

第四節　醫方明と諸學との關係

當時印度に於ける諸學とは如何なるものを稱へしやと云ふに玄奘の西域記には

七歲之後漸授二五明大論一

とありて南海寄歸傳により「西方之學風」と云へる一章を置き中に五明を擧け

此等醫方明傳二于帝釋一、五明一數五天共遵

とあれば五明は印度當時の人民か均しく修めし普通教育上の科程なり、故に予は印度當時の諸學なるものを五明とせり五明とは

一　聲　明……文字の學なり
二　因　明……論理の學なり
三　醫方明……衛生の學なり
四　工巧明……諸技藝の學なり
五　內　明……宗教の學なり

此五種の學は印度當時の普通教育上の科程なりしを以て寄歸傳には五天共に遵ふと云ひしものなり、されど內明なる宗教の學は婆羅門種にあらざれば修むることを許されざりしを以て五明を研究するも獨り婆羅門種のみの必須の學にてありしやとも思はる、若し然りとすれば西歐醫術の起原か截石術を以て世界周遊を爲せし僧侶に始まると云ふと均しく韋陀を誦して立てる婆羅門種か獨り此か五明を研究せしと云へは東西其醫術の起原か宗教界に採りたると云ふに於て一致すと云はさるを得ず然れ共婆羅門種か若し此術を學はさりしとすれば以上の議論に何等の價値なきも予は印度四種族中特に獨り韋陀を誦するてふ婆羅門種と云ふより其韋陀を誦すると共に其韋陀中に含まるゝ養生、繕性、醫方を必す誦せしことを信するを以て斯くは云ひしなり、若し然りとすれば其結果として醫術は印度の最上種族の手にあるものとして其起原亦神話に出てたるものとして四種族の間に尊敬せられたる聖職たりしことも信じ得らるゝなり、之に反して五明の學は四種族の共に學ひたりしものとすれは普通教育の科程に養生と云ひ醫方と云へる衛生と醫術とを學はしめたりと云はさるを得ず、此の如くなれば印度當時の教育の進歩や現代亦遠く及はさりし施設と云はさるを得さるなり、是れ共に人生の爲祝福すへきことならずや

第五節　醫方明と諸學との起原

前に既に述へたるか如く韋陀論中に此五明か含まるゝ以上は釋迦以前に起原の存すること論を俟たさるも、現今世に流布する佛典中に果して其事を記載するものありや否やと云ふに、梵漢對映集に曰く

抑梵王者、色界第八禪天也、下二第二禪一、說二聲明一、無二人機一故、亦下二初禪一、現二五明一、嫁二毘紐天一生二三子一等、」「所謂五明、一二正面說二內明一是佛法也(乃至)二二頂上說二聲明一(乃至)、三二右面說二因明一是外道論議惑障沙汰也(乃至)、四二左面說二醫方明一是梵咒針藥也、五二後面說二工巧明一是鍛番匠也、

又悉曇考要に曰く

成刼初、下二來光音天一、成二大梵王一、是名二商羯羅天一、亦名二摩醯首羅一、有二五面一、五面有二五明一、頂後明名二聲明一、說二梵王四十七言一、五明論者、第一醫方明爲二東方說一、今時醫術方經等從レ是興、第二因明論爲二南方說一、明二法門是非一說レ之也、第三聲明論爲二西方說一、今悉曇本文末書音韻等是也、第四工巧明論爲二此方說一、巧匠鑄治等百工業是也、第五內明論爲二中央說一、經律論是也、

由是觀之五明並に醫方明の起原は佛典中にも梵天の所說として婆羅門の神話より出てたることを說くものなること明なり

第三　佛教には身命を如何に觀るか

佛の敎の多くは身命を輕視す、今經說を引用するに

富と両親と親戚と肉身の快樂とよりも遙に大なるものは眞理なり、故に是等を放け棄てゝ眞理に從ふべし(巴利文雜阿含經)

富貴は求むると守ると失ふとに苦しきものなり（百緣經取意の文）

是の身を苦の本となし餘の苦を枝葉と爲す（心地觀經）

是の身は災あり百一の病と惱を起す（維摩經）

道を守りて貧賤にして死すとも無道を爲して富貴にして生きるなかれ（六度集經）

以上の諸經に見れば身は是れ三界の枷なり又罪惡の集團なりと云はさるを得ず、故に禪には寒山之を痴肉欒と云ひ道灌い「へんなし袋」と云ひ狂句禪には厄介袋と云ひ世話袋と云ふ、予か經驗によるもさること多し、九尺二間の長屋でも持てば面倒も起りて家賃の催促もせねばならず收めざれば腹も立てねばならず喧嘩もせねはならぬことが起り、此體がある爲に衣食の心配も起る心配の結果罪惡を造る樣になる、今の監獄に居る者の多くは此身あるがすなはち本と云はさるへからず、されば肉身はそれ罪業の本か、然り、佛喩說して曰く「酒客あり酒瓮に酒を蓄ふ一日妻をして酒瓮に酒を取らしむ妻蓋を執りて酒瓮を瞰るや瓮の中に美人あり夫の下に走りて美人を蓄ふることを怒る夫此を蓄へすと云ふ妻大に怒る夫驚きて酒瓮を瞰むや瓮中美男あり夫、妻に美男を蓄ふることを怒る是れ互に自己の瓮中に映る影を守ふのみ而して瓮を割るに人なかりしと」、嗚呼人は肉身の爲に惱み煩ひ罪惡を造る寧ろ死せんに如かざるか

此の如く眞に肉身は罪業の本にして死せんに如かさるか、佛答へて曰く

人の墮落するは生命あるか故にあらす財產あるか故にあらず勢力あるか故にあらず、但生命財產勢力に執着するか故なり

と然らば人が肉身に執着するを以て專ら之を戒められたるものにして、若し執着せされは肉身こそ又なく貴ふけれ、

佛又曰く

人の重んする所は身なり命なり財なり、此三の者惜むに足らす又輕んずべからず

と是れ執着せは惜むに足らざるも執着されば輕んずべからざるなりと云ふにあり、以て戒と爲すに足る

人の貴きは命の貴きにあらず身の貴きにあらず身は骨と血と肉とのみ犬も猫も命あり鷄豚牛羊等亦骨と血と肉とのみ、人の骨は鯨の骨に及ばず人の肉は牛豚の肉に如かず何そ身命其者に貴き理由あらんや、然らは則ち人の貴きは道を行ふ心あるか爲なり此心を行ふか爲なり、此道を心に行はんとするには身命の健全を要す、是れ身命を以て貴しと爲す所以なり、之に就き面白き一場の問答は那先比丘經の上にあり

彌蘭王、那先に問ふて曰く沙門能く自から其身を愛するや否や、那先言く沙門自ら其身を愛せす、王言く沙門自から其身を愛せすとならは何か故に臥して安温を得食するに善美を得て自ら護祝らんと欲するや、那先言はく王曾て戰鬪中に入りしことありや否や、王言く然り曾て戰鬪中に入りしことあり、那先言く戰鬪中に入りし時曾て刀刃矛箭の爲に瘡けられしや否や、王言く我れ頗る刀刃矛箭の爲に瘡けられたり、那先言く其瘡を如何するぞ、王言く我膏藥と綿絮とを以て裹むのみ、郡先言く瘡を愛するか爲の故に裹むや、王言く我瘡を愛せす、那先言く殊に瘡を愛せされは何か故に裹んで之を護るや、王言く我瘡をして早く癒へしめんと欲すれはなり、那先言く沙門も亦是の如し其身を愛せされと衣食するは用て美を作し用て好と作すに非ず、僅に身體を支へて佛の經戒を奉行せんか爲のみ

と以て佛教か人の身命其物を貴はさるも道の爲に身命を貴ふものなることを知るべし、是れ眞理也

第四　佛教は病人に如何に教ゆるか

耆婆と並ひ稱せらるゝ扁鵲に就て史記の扁鵲傳には六種の病の治せさる原因を數へて其第六に「信直不レ信レ醫六不治也」と云へることを以てせるか、增一阿含經には病人の心得に就きて五種の戒を說く中第三に「三に醫藥に親近め」と云ひ、諸乘法數には九の横死の原因を說く中第一に「一得レ病無レ醫死」と云ひ、藥師如來本願經には「衆生あり病を得て醫藥を服せす病を見る人なきか爲に死するを横死と云ふ」と云ひ、九横經には九横死の因を說き其第四に「四には前食の未た消へざるに重ねて食ひ旦つ藥を服せざるときは横死す」とあり、增一阿含經には又「一には良藥を分別せよ」と云ひ「四には能く湯藥を經理して病人の癒へ若くは命終るまて更らざれ」と云ひ、善生經には更に「若し貧しくして物なくば應に種々の呪術を誦し心を至して看病し將養し療治すへし、財ある者を勸めて種々の湯藥を和合し行きて病を看よ、方を案じ診視て病の所在を知り其病處に隨ふて療治を加ふべし」と云へり、是を以て佛の敎なるものは彼の妊婦に子安觀音に走れ眼病者に目安觀音に走れなど稱するか如き敎にあらさるを知るべし而して增一阿含經に說ける病人の誡なるものは

疾病める人は一には食物をゑらべ、二には時に隨つて食へ、三には醫藥に親近せよ、四には愁と喜と瞋とを懷ふなかれ、五には看病の人に向つて從順なるべし

にして、病人と看護人に對しては毘尼母論に

病人、看病の人のことばを用ひず看病の人病者の意に違ふは並に罪を得

とあり、聊か其一半を知るゝ足るべし

第五　死生因緣なりと云ふ說の眞否

生きるも死ぬるも皆因緣、壽命は前生よりの定り、善き醫者を得ても善き藥を得ても壽命かなければ死ぬ、醫者に診て貰はすとも藥を飲まざるも壽命あれば死せすと、世にはかゝる迷說を云ひ且つ信するものなきにあらず、之を佛敎には過去と現在との因果のみを說き現在と未來との因果を知らざる宿作外道と稱す、此よ就て淨土眞宗の中興蓮如上人は病の爲に親を失ひ子を失ひ夫を失ひ妻を失ふて打沈めるものに對して其御文章に

當時コノコロ、コトノホカニ、疫癘トテヒト死去ス、コレサラニ疫癘ニヨリテハジメテ死去スルニアラズ、生レハジメヨリ、サダマレル定業ナリ、サノミフカク、オドロクマジキコトナリカドモ、イマノ時分ニアタリテ死去スル時ハ、サモアリヌヘキ道理ゾカシ

と諭說されしも、而も之を以て現在病める者に對しての敎訓と思ふ勿れ、誤り易きことなれば大に注意を要す、此外近時自殺者の多きも病氣には關係なきか如くなるも彼も一種の病氣なり、斯る病人に對して

先生ヨリサダマレルトコロノ死期ヲイソガンモ、」カヱリテオロカニマドヒヌルトモオモヒハンヘルナリ

と敎へられたり、而して先生よりの定れる命と云ひ病氣にかゝりても打捨てゝ療養することなきものに對して、上人は更に御一代聞書に

一、時節到來トイフコト、用心ヲモシテ、其上ニ事ノ出來候ヲ時節到來トハイフベシ、無用心ニテ出來候ヲ時節到着トハイワヌナリ

と示されたり、斯く二面の敎ありて初めて圓滿なる敎訓と云ふを得ん、然るに世には其一面を知りて他の一面を知

らさる者多し、心して病人に接せんことを望む

次に佛が如何に此問題に對して教訓し給へるかを說かんに、佛、優婆離に語りて曰く病人に三種あり一には病に應する藥と食物とを得、法に適へる看護を得て死するもの(是れ眞の時節到來と云ふものならん)、二には病に應したる藥と食物とを得さるも看病法に適へるか爲に活くる者(是れ醫藥までも病に適へるものを得たる者に比すれば用心にかけたる處あるも看病だけの用心ありたるか爲に全快せるものなれば忽諸に附すべからさるものは醫藥と看病なり)、三には病ゑ害ある藥と食物とを得法ゑ適へる看病人を得て活くる者あり(斯く有害の藥と食物とを得てすら看病の宜しきを得たる爲に全快すとすれは用心の肝要なること燎々火を見るよりも明なり)と、されば病みて因緣任せに放棄するは最誤れるの甚しきものゑして深く看病を重んすべき事を忘るへからさるなり

第六　印度の三大醫

第一は耆婆、扁鵲と並ひ稱せらるゝ其耆婆にて耆婆の傳記は一代藏經中に佛說耆婆經と云へる一部ありて隨分長篇のものなり、然し其着想其結搆中々に面白く經中、腹部の手術、大腦に對する手術、醍醐味と云へる藥の製法等よりX光線とでも云ふへきものなどありて醫學者の讀まるゝ小說としては好個の讀書なり、今茲に之を物するの餘裕なきを以て其一讀を勸め置かまくのみ、只其中に就て言ひれくべきは佛教と醫術との關係と云ふよりも寧ろ僧侶と醫師との關係を言ひ現はせる文あり、そは全經に耆婆か蠻王と云へる王より招かれたるに蠻王日頃病發るときは大に怒りて人を殺すの癖あり、耆婆之を恐れて行くことを忌むも强ひて求めらるゝ爲に耆婆大に窮し之を釋迦佛に謀る、其時の問答を擧くる中釋迦耆婆に對し

與レ汝於ニ前世一有レ約、爾行而治ニ身病一、我行而治ニ心病一、共提携除ニ衆苦惱一

と仰せられたり、すなはち之に依りて見るも導師となり醫師となりて衆生身心の苦惱を除くの心を要するの意を知るに足らん、而して此意味に似たる意を法苑珠林には

聖衆爲ニ良醫一　救ニ濟苦惱患一

洗浴施ニ清淨一　瘡癒蒙レ得レ安

と云ふ、所謂僧侶と醫師とか衆生身心の苦惱を救ふと云ふ點に於て一致するの理由なり

第二の大醫と云ふは等しく佛在世中の時縛伽なり、時縛伽の傳記は「ポールケーラス」博士の「佛陀の福音」の一節に物せり、故に其一部を寫して傳記に代へんとす

佛病に犯され給ひたる時阿難は頻毘娑羅王の侍醫なる時縛伽を招きて之を診せしめたり、時縛伽は固より佛を信せるものなりしかば心を竭くして藥をすゝめ浴を取らしめ給ひたれは佛の病は遂に全く快癒するに至りぬ

其の比、鳥闍衍那國の王鉢羅樹多と云へるが黃疸を病みければ頻毘婆羅王の侍醫時縛伽を招きて其診察を乞ひ病爲に癒ゆるを得たり、王大に喜ひ最勝れたる衣服一襲を贈りぬ、時縛伽竊に以爲らく是は頗る勝れたるものなり斯る衣を着けん人は圓かに聖き佛にあらざれは摩羯陀國王施尼耶頻毘娑羅王の外世にあるべしとも思はれず時縛伽乃ち此一襲を持して佛のもとに到りその前に出てゝ恭敬禮拜せる後側近く坐して曰ひけるは、世尊吾は佛の吾か供養を受け給はんことを願ふ、佛、時縛伽よ如來は總て其何たるを知らさるに供養を許すことなし

時縛伽、世尊吾か願は宜しきに適へり人の拒み得る所にあらす

佛言へ、時縛伽、世尊の常に着け給へるは墓地或は塵芥の地より拾ひ上けられたる弊衣なり敎會の比丘も亦然

らすと云ふことなし、さて主よ、此一襲は鉢羅樹多王の吾に贈り給へる所にて最好最勝最第一最珍最貴他に比すへきものなし、世尊よ願くは吾此衣を奉するを受け給はんことを又敎會の比丘をして淨衣を纏はしめ給はんことを

佛は衣を受け給ひて道の話を爲し給へる後、比丘衆に告け給ひけるは

捨てゝ用ゐぬ弊れ衣を着けんと思ふ者は之を着けよされど淨衣を着けんと思ふ者は淨衣を着けよ、彼を好むも此を好むも吾は汝等の爲すに任せて咎めざるべし

とあり、是れ一は垢衣の衛生に害ある所より起りたるものならん、特に美衣を着けよとは命し給はざるも垢つけるをは戒め給ふことあり、僧祇律に曰く

佛、諸の弟子に告け給はく諸の弟子よ頭髮の長きと爪の長きと衣裳の垢づけたると時の宜しきを知らざると多く論するとは比丘の五毀辱の法と名く

と以て佛か衞生上衣の垢つけるを戒められたるを知ると共に時縛伽によりて淨衣を着け給ふの端を開きたるに合せて味ふへき價値あり、然れとも余は時縛伽に對しては此外に傳記を知るに由なし之より以上の事は他日の研究を待つの外なけん

第三の大醫は釋迦滅後四百餘年に於ける柝羅伽(チヤラカ)なり、柝羅伽の傳記は明治三十年の中央公論誌上姉崎博士か「スヽラタ」の醫方明論として印度の醫術を說かれたる際に其名前を文中に示されたることあり、予常時より詳しき傳記を知らばやと思ひたりしも此を知るに由なかりしが昨年丙午社によりて發行せられたる「ポールケーラス」氏著にして鈴木大拙居士の譯になる「阿彌陀佛」と云へる書は此柝羅伽の傳を說き明せり、而して此柝羅伽が初め醫學を修

めたるも青年の頃道念頓に沸き布路沙布羅市附近の一山寺なる須菩提尊者の下に入りて弟子となり禮拜誦經坐禪に餘念なかりしも心に安心するを得ず心の悶絶ねざりしを以て須菩提の許を得て中天竺なる馬鳴菩薩の下に行かんとしける時、北天竺月支國王より急使來り城下は惡疫流行今や月支國父王を失ひ第二皇子は病に斃れ迦賦色迦皇子危篤に迫る直に來り救へとありければ急使と共に月支國に出發し到りて之を診察し遂に迦賦色迦皇子を全癒せしめたりとあり、全書は慥に吾人か信仰の上に修養の上に一讀の價値ある書なることを諸君に勸めたかん、而して全書には栝羅伽の小傳を說きて

迦賦色迦王と栝羅伽とは同じ年輩にて幼少の時より學問に遊戯に頗る親しき間柄なりき、成人の頃ほひに王は身を軍籍に入れ栝羅伽は先帝の侍醫時縛伽につきて醫學を修めたり、良師の指導と弟子の精勵とによりて修業の進歩著しく數年ならずして栝羅伽は時縛伽の高足となり醫界に於ける名聲大に揚りぬ、迦賦色迦かねて此事を知り居たるより父王の病革れるとき栝羅伽を勸めたれど容れられさりしが今や自から病篤の人となるに及ひて直に舊友を呼ひ還して其仁術に依賴せり

とあり、以て栝羅伽の小傳を知るに足らん、尙詳しきを知らんと欲する人は全書を一讀せられんことを望む（但し此栝羅伽の師時縛伽は佛在世當時の時縛伽とは同名異人なり注意せられ度し）

第七　佛典中醫術を說ける書目

佛典中醫術を說けるものを列記せば佛說醫經、佛說醫喩經、藥師本願經、仝福田經、佛說除一切疾病陀羅尼經を始めとし、治禪病秘要法、四諦經、修行道地經、涅槃經、金七十論、南海寄歸傳、因明前記、大乘法數、諸乘法數、飜

譯名義集、閑窓雜錄、止觀、仝會本及科本、小止觀、行事抄、圓覺集註、僧祇律、緇門寶鏡錄、錄內拾遺、金光明經(除病品)、法苑珠林(病苦篇)、釋氏要覽(膽病)、義楚六帖(病及醫療篇)、諸經要集(病苦及醫療錄)、類雜集(醫藥部)、印度藏志、病堂策等には醫術に關係する多少の說明あり、其他病名を表はせる經目を敎へは佛說療痔病經、仝經畧賛、救療小兒疾病經、醫女人經、一切眼疾病陀羅尼經の如きまた參考と爲すに足る

第八　佛典中醫術を說ける分類

佛典中如何に分類して醫術を說くやと云ふに佛說醫喩經には良醫の四法として病狀、病因、醫療、豫後の四種を擧け、諸の經論を見るに皆此四法に分類するか如し即ち佛典中に於ける醫術の分類畧ほ察するに足るものあらん、依て玆に諸經諸論の分類を列記して聊か參考に資せんとす

明燈抄卷一本ノ十七丁には

四醫方明謂二藏中畧辨二病狀病因一除レ病令二病不レ起、四種善巧名二醫方明一

と云ひ瑜伽論卷三ノ十八丁には

醫方明論四種相轉一者顯二示病躰一善巧相、二者顯二示病因一善巧相、三者顯三示斷二已生病一善巧相、四者顯示已斷之病當不二更生一善巧相、

と云ひ、閱藏知津卷ノ三十七ノ五丁には瑜伽論を引きて

二醫方明處一於二病相一善巧、二於二病因一善巧、三於二已生病一斷滅善巧、四者於二已斷レ病後一更不レ生善巧、

と云ひ、菩薩戒經第三ノ十一丁には

求治病術一爲二四事一故、一者爲レ知二病相貌一故、二者爲レ知二病因緣一故、三者爲レ知レ病除癒一故、四者爲レ知二病癒之後更不レ起故

と云ひ、又因明前記卷上本ノ二丁には

醫方明論有二四種相一、一顯二病體一、二顯二病因一、三顯二斷已更病生一、四顯二斷已不レ生、

と云へり、即ち諸經諸論の醫術を論する分類總て斯くの如し、次下此分類法によりて記すことゝなすべし

第九　佛典中の病狀論

一　診　察
二　病　狀
三　病　理
四　病　種

一　診　察

前述の佛典中の醫術の分類は醫喩經の良醫の四法なるを以て、良醫たるの人は先つ第一に病狀病體を知り更に病理によりて病因を究め然る後醫療に移りて手術を施し適藥を投するを順序となすか如し、僧祇律には

行きて病を看、方を案し診視て病の所在を知り、其病所に隨ふて療治すへし

とあり、故に第一に診察を置く、而して診察の法たるや種々あるべしと雖佛典中予は未た何等の診察法をも見る能はず、然れとも彼此比較して判斷するに、法苑珠林の醫療部には

人有ニ四肢五臓一、一覺一寢、呼吸吐納、精氣往來、流而爲ニ榮衛一、彰而爲ニ氣色一、發而爲ニ音聲一、此人之常致也、

とあれば覺寢、呼吸、榮衛、氣色、音聲等に依りて病狀を診察判斷するものならんと想像するを得るも只是予の想像するものにして何等の價値を有せず、然るに近時南海寄歸傳を見しに法顯三藏か印度に行き印度の風俗を見しものを記する中

西方五明論中、其醫明曰、先當下察ニ聲色一然後行中八醫上、如不レ解ニ斯妙一求レ順反成レ違、

とあるにより先つ顏貌診斷より他に及ひしことを知るの證となすを得んか

二　病狀

單に病狀のみを說かんことは甚た難事なり、そは佛典中の說明の方法は病狀と病理と病種とを互に相混交しあるを以てなり、故に此處には法苑珠林の一節を擧くるのみとせん

夫三界遐曠、六道繁興、莫レ不下皆四大相資ニ五根一成ニ體、聚則爲レ身、散則歸レ空、然風火性殊、地水質異、各稱ニ其分一、皆欲レ求レ適、求レ適之理既難、所以調和之乖爲易、一大不調四大俱損、

と云ひて四大順を得は健康なるも四大一たひ調を失へは病態と變易する旨を說き、更に

眼赤如血　両耳出膿　鼻中出虫　舌襟無聲

と云ひ、或は

所レ食之物變成ニ鹿澀一、六識閉塞如ニ醉人一、

と云ひ、五衰を說きて

一身光不現、二花鬘萃頰、三両腋汗流、四體便臭穢、五不樂本坐

と云ふ、以て病狀の一端を知るべし、詳しき事は次の病理によりて知られたし

三　病理

近時醫學を研究するには博物理化學を始とし人身生理、組織學、解剖學より進みて病理の研究に入るを順序とするを以て佛典中の醫術を研究するにも此順序を履まざれば佛典中の病理を明了に說明すること困難なり、然れとも佛典中より一々之を調査し以て學系を明にすること甚た困難なり、故に先つ其一斑を彼れ此れ取り合せて說明せんに、佛敎には人類の母胎に宿るには父母の交合によりて宇宙間に浮遊する識即ち靈魂が父母の赤白二締即ち男女両精を所依として宿り此赤白二締を肉體として發達するを說くものにして、其胎內に在る內を胎內の五位とし其出產後より老年に至る間を出胎の五位と立つ、今之を列記せは

胎內ノ五位　（倶舍論世間品ニ委シ）

第一位　羯刺藍（凝結ト譯ス）　父母ノ赤白二締即チ両精ノ結合ヨリ成ル新生體ヲ云フナリ、懷妊后一週間ノ事

第二位　額部曇（胸ト譯ス）　懷妊后第二週間ノ事ナリ

第三位　閉尸（血肉ト譯ス）　懷妊后第三週間ノ事ナリ

第四位　健南（堅肉ト譯ス）　懷妊后第四週間ノ事ナリ

第五位　鉢羅舍佉（支節ト譯ス）懷妊后第五週間目ヨリ第三十八週間ノ事ナリ

此胎內ノ五位ノ週日數は即ち三十八個の七日なり、故に日數に換算すれは 7日×38週＝266日 となるを以て今日の實際と餘りに相違すること多からざるか如し

此外普通に使用せざるも在胎八位と云へることあり

一羯邏藍　二遏部曇　三閉尸　四健南　五鉢羅賒佉　六髮毛爪位　七根位　八形位

是なり

以上の説明は人類に就ての説明にして一般動物に就ての説明にあらず、一般動物の説明に就ては倶舍論に之を胎卵濕化の四生に分類して

胎　生――如二象、馬、牛猪、羊、驢等一

卵　生――如二鵞、孔雀、鸚鵡、鴈等一

濕　生――如二虫、飛蛾、蚊、蚋、蜒等一

化　生――如二那羅迦天、中有等一

と云ひ、首楞嚴經には

卵　生――魚鳥龜蛇の類

胎　生――人畜龍仙の類

濕　生――食蠢蠕動の類

化　生――轉蛻飛行の類

有　色――休咎精明の類

無　色――空敢消沈の類

有　想――神鬼精靈の類

無　想――精化木石の類

非有色――諸水母等の類
非無色――咒詛厭生の類
非有想――彼蒲慮等の類
非無想――土梟破鏡の類

の十二類を以て宇宙間に於ける動植鑛物有機無機の總てを分類せり

此外種々の說明あるも今は省畧して人類のみに對する說明を擧けんに、前に擧けし胎內の五位は識の宿る肉體なることを說明せしも未た男女の別の生することを說かず、故に之を說かんに佛敎には母胎に宿るを生有と云ひ、宿りし時より一生涯を本有と云ひ、死するを死有と云ひ、死して後識(俗に云ふ靈魂)が宇宙間に浮遊して母胎に宿る迄を中有と云へるが、此中有より母胎に宿る時其色も無く形も無き識は男女其性其因緣の異るに順つて父母相愛の一刹那に其母に愛を起して父に瞋恚の情の起る時は男子となり、其一刹那に父に愛念を起し母に對して瞋恚の情の起る時は女子となると云ふにあり、而して次に此識が父母の赤白二締を肉體として發達する順序を說くに前には胎內の五位に就て示したるが、又十二因緣に依りて說明する道あり、十二因緣とは

一、無明　二、行　三、識　四、名色　五、六入　六、觸　七、受
八、愛　九、取　十、有　十一、生老　十二、死

なるが、此內第一、第二は生理の發達を論するに要なきも、第三の識即靈魂か母胎に入るや第四の名色となる、其名色の名は識、色は肉體を指したるものにて肉體と心識、換言すれば物心二者の包合體にして胎內の五位の第一位より第四位に當る、第五の六入は又六處とも云ひて眼、耳、鼻、舌、身、意の六根具足するを云ふ、之か胎內の五

位の第五位「支節」に當り所謂今日の五官相備はると云ふに當れり、而して胎内の五位を經て月充ち日滿ちて出胎するや第六の觸覺を生し、第七の憂喜苦樂の受覺を生し、第八の愛念を生し、第九の取即ち取て我物とせんとするを本として更に第十の有と云へる業因を成し、第十一の生涯を送りて第十二の死に歸すると云ふ順序なり而して其出胎後より老境に至る迄を佛教にはまた分て五位となす

第一位　嬰孩　自二一才一至二六才一
第二位　童子　自七才至十五才
第三位　少年　自十六才至三十才
第四位　盛年　自三十一才至四十才
第五位　老年　自四十才以後

即ち出胎之五位是なり

次に前には胎内の五位に「支節」と云ひ十二因縁には「六入」又は「六處」と云ふのみなりしが、更に姉崎博士は「ス、ラタ」の醫方明論によりて當時印度の醫學には身體を四肢胴部頭部の六部に分ち、身體全部に亘りては七ノ膜、七十ノ血管、五百ノ筋肉、九百ノ腱、二十四ノ神經、三百ノ骨、二百十二ノ關節、九ノ感覺を數へたりと云へるが、焉意經によれは一日の呼吸を三万六千六百五息と數へ、往生要集卷上本(二十丁有)には

凡人身中、有二三百六十之骨一、節々相拄、謂指骨拄二足骨一、足骨拄二踝骨一、踝骨拄二蹲骨一、蹲骨拄二膝骨一、膝骨拄二脛骨一、脛骨拄二髖骨一、髖骨拄二腰骨一、腰骨拄二背骨一、背骨拄二勒骨一、復背骨拄二項骨一、項骨拄二頷骨一、頷骨拄二牙齒一、上有二髑髏一、復項骨拄二肩骨一、肩骨拄二臂骨一、臂骨拄二腕骨一、腕骨拄二掌骨一、掌骨拄二指骨一、如レ是展轉次篤鑠成(下畧)等、

と云ひて身體の構造を說き、更に自餘の佛典には內外の諸機能を分類して

一、髮、毛、爪、齒、眵、淚、涎、唾、尿、垢、汚、

二、皮、膚、血、肉、筋、脈、骨、髓、肪、膏、腦、膜、

三、肝、膽、腸、胃、腎、心、肺、生藏、熟藏、赤藏、白痰、

と說けり

以上は身體の構造及生理の一斑を述へたるものなるも、更に此生理の因つて起る所並に身體を組織する要素は何物なるかを求むるに、佛典には人の身體は四大所成なりと立つ、尤も別に極微所成と云ふ說あるも佛典中の醫術を說くの基礎として論せられたる處を見す、故に今此四大所成說によりて之を說かんに

四大とは地水火風の四を云ひ、此四大に就て又假の四大、實の四大を分ち、假の四大とは物質としての四大を云ひ實の四大とは勢力の四大を云ふ、而して此實の四大を勢力の四大と云ふは、堅、濕、煖、動の四種の勢力を云ふものにして之を不可見のものとなす即ち宇宙間に物を堅める力あるは地大なり、物を濕す力あるは水大なり、物の煖まる力あるは火大なり、物の動く力あるは風大なり、即ち此四種の勢力の本體を實の四大と云ふにあり、又假の四大を物質の四大と云ふは土と水と火と風となり、此四大が吾人々類の身體を組成すると云ふを以て佛典中の醫術の基礎と爲す、今之を人身組織の上より見るに人體を形成する多くの筋肉及骨髓は地大にして淚、唾、涎、血、尿、鼻汁の如きは水大なり、吾人の體溫は火大にして、呼吸する氣息及運動の出來得るは風大なりと云ふ、是れ四大所成說なり

此四大所成說は佛典中の醫術を說く病理學を構成せり、即ち此四大所成說と病理學の關係を簡單に說明するものを

前きに病狀論に揭けし法苑珠林の說明とす、重ねて之を學くれば

夫三界遐曠、六道繁興、莫不皆四大相、資五根成體、聚則爲身、散則歸空、然風火性殊、地水質異、各稱其分、皆欲求適、求適之理旣難、所以調和之乖爲易、一大不調四大俱損、

なり、之を基礎とし此より種々に演繹して說明せるものを佛典中の病理學となす、聊か此か說明を諸經論より取りて列記せんに

先つ行事抄には

四大互反六府成レ病、

と云ひ、金光明經には

四大諸根、衰損代謝、而得二諸病一、

と云ひ、佛醫經には

人身中本有二四病一、一者地、二者水、三者火、四者風、風增氣起、火增熱起、水增寒起、土增力盛、本從二是四病一、起二四百四病一云云、

と云ひ、修行道地經には

其人身中、因レ風起レ病、有二百一種一、寒熱共合、各有二百一一、凡合二計之一四百四病一云云

と云ひ、小止觀には

一大不調、百一起病、四大不調、四百四病一時俱動、

と云ひ、飜譯名義集には大智度論を引きて

智論曰、四百四病者、四大爲レ身、常相侵害スレ、一一大中、百一病起、冷病有二二百二、水風起故、熱病有二二百二、地火起故、

と云ひ、更に佛醫經によりて之を諸種の病に配屬すれば

地增力盛——身の病を發し
水增寒起——口の病を發し
火增熱起——眼の病を發し
風增氣起——耳の病を發し
火少寒多——目冥らむ

とあり、而して又年中の四期に配して寒熱風病の發し易きを示し、之を法苑珠林には

春　正月二月三月——寒多
夏　四月五月六月——風多
秋　七月八月九月——熱多
冬　十月十一月十二月——有風有寒

と云ひ、其理由として

春寒多者——以二萬物皆生一寒出故
夏風多者——以二萬物榮華一陰陽合聚故
秋熱多者——以二萬物成熟故

冬有風有寒者——以二萬物終亡一レ熱故

と云ひ、更に四期の人身に及ぼす特點を示して

三月四月五月六月七月、時得レ臥、何以故、以二風多一故身放、八月九月十月十一月十二月、不レ時不得臥、何以故、以二寒多一故自縮、

と云へり

此の如く佛典中の病理學を論するの基礎は四大所成說より割り出せる想說なりと云ふべし、然れとも此病理學を以て立てる醫術か兎に角印度及ひ支那等の病者を少なくも二千餘年間救ひ來りしと思へは幾分今日の學術を以て精査するも一種の研究事蹟として豈又面白き業ならすとせんや

四　病　種

前に論せし病理に順ぜは病種亦四百四病ありと謂はざるを得ず、曰く地大病水大病火大病風大病、此四種の增減によりて各百一の病を生し合計四百四病を成するは勿論なるも、佛典中には尙四百四病以外に數多き病名を列記せり、即ち佛敎が宗敎として立つを以て自ら宗敎的救濟を受くるものをも亦病種に數へらる、今佛典上に於ける病種を見るに大約二種に分ち更に之を種々に區分するか如し、先つ其第一の分類には身の病と心の病とに區分し、其身の病とは今日の所謂生理上の病を云ふものにして心の病とは所謂心理上偏理上の病を云ふものなり、此身心二種に病種を分類するものを擧くれは、耆婆經に釋尊か耆婆に對しての物語を載する中

與レ汝於二前世一有約、爾行而治二身病一、我行而治二心病一、共提携除二衆苦惱一、

と云へるも病種を身心二病に分てる一例なり、其他四諦論には

病有二種一身、二心、

と云ひ、其身病に復二種を分ちて

身病復有二種一因界相違一名二緣內起一二因二他逼觸一名二緣外起一是身病者、由レ名因レ處有二差別一故、品類多類、

とあり、亦其心病にも二種を分ち

乃至心病者、因二邪妄一起、謂憂煩等、此病亦有二種一一緣二內境一名二內門惑一二緣レ外爲レ境、名二外門惑一由レ名因レ處有差別故、品類多種、

とありて、其心病の中には貪、瞋、慢、癡、見、疑、諂、曲、欺、誑等を數へり

其他身病に就ては舍頭諫經には

欬病、上氣、風癢、熱病、

の四種を擧げ、四諦經三卷には尙諸種の病名を擧げたり、此外大智度論には身病を前世業報病と今世特發病との二種に分ちて

病有二種一先世行業報故得二種々病一今世涼熱風發故亦得二種々病一

と云ひ、其今世病を內外科とも謂ふべき二種に分ちて

今世病有二種一一者內病、五臟不調、結堅宿疾、二者外病奔車逸馬、推壓墜落、兵刃刀仗種々諸病、

とあり、近來姉崎博士の物せられたる中央公論の一節には印度當代の病名を列記して

瘻摩窒斯、痔疾、瘧衝、加太雷、關節痛、喧嗽、下痢、痛風、蜜尿病、黃疸病、蛔虫、酒客譫妄、皮膚發疹、赤痢、癆瘵等

を擧く、以て印度當代の病種の大概を知るに足らん歟

第十　佛典中の病因論

翻譯名義集は病を治する方法を明にするには既に深く病源の起發する所を知りて當さに方法を作して之を治すへしとあり、又善生經には行きて病を着、方を案じ診視て病の所在を知り病所に隨ふて療治すべしとあり、良醫の四法と云ひ治病の四善巧にも病を治するには病狀を知ると同時に病因を究むるを要とす、故に茲に諸經論中より病因を說くものを擧けんに、止觀には病起の六業とし

一、四大不調なるとき　二、飲食を節せざるとき　三、坐禪の調はざるとき　四、鬼の便を得るとき　五、魔の爲す所　（六、略）

によりて病を發することを說き、佛醫經には病起の十因を擧けて

人病を得るに十の因緣あり、一には久しく坐して立たざるとき、二には食貪すことなきとき、三には憂愁るとき、四には疲れ極まるとき、五にも嬉佚するとき、六には瞋恚れるとき、七には大便を忍ふとき、八には小便を忍ふとき、九には上風(息)を制するとき、十には下風(放屁)を制するとき、

に病を發すと說き、藥師本願經には橫死の因緣を說く中に

遊獵、放逸、嬉事、飲酒等に耽りて度なき爲に害せらるゝを橫死と云ひ、又

飢渴に困りて死するを橫死と云ひ、又

厭禱、毒藥等にありて害せらるゝを橫死と云ふ、

とあり、其他九横經にも横死の九因を擧くる中

一には食ふへからさるを食ふ時、二には飲食を量らさる時、三には冬と夏とを知らず、他國に至り俗風を知らずして食いて消(化)せさる時、四には前食の未た消せさるに重ねて食ひ且つ藥を服せざる時、五には大小(便)の來れるに是を爲さゞる時、(六、七、八、九、省略)

即ち横死する旨を説く、是れ亦病起の因緣を説くものなり、且つまた僧祇律には横死の因緣を説く中に

一には益なき食と知りて貪り食するとき、二には籌量知らすして食する時、三には內食の未た消(化)せさるに食するとき、四には食未た消(化)せさるに嘔吐するとき、五には已に消して出すへきを强て持つとき、(六、七、省略)、八には要心を懈怠るとき、(九、略)

横死すと云ふ、是非病起の因とするに足れり

第十一　佛典中の醫療論

一　醫術　二　投藥

飜譯名義集に

明治病方法、既深知病源起發、當下作方法治上之、治病之法、乃有多途、

と云ふも要するに醫術と投藥との二途のみ、故に今此二項に就て少しく述へ以て醫療論とせん

一　醫術

諸經諸論に良醫の四法に次て八術を説く、即ち金七十論には八分醫方所説能滅身苦と云ひ全書備考には之を解

釋して八分醫方五明之一爲滅苦因と云ひ、又止觀補行には八術十醫を說くも此八術十醫は但し配合の異なるのみなり、涅槃經にも此八術を說き、仝經の疏には其術名を列ねて

一治身術　二治眼術　三治胎術　四治小兒術　五治瘡術　六治毒術　七治邪術　八治星術

と云へり、而して之を南海寄歸傳に就て見るに

言八醫者

一論所有諸瘡（言瘡事兼內外）

二論針刺首疾（首疾但在頭）

三論身患（齊咽已下名身患）

四論鬼瘴（鬼瘴謂是邪魅）

五論惡揭陀藥（惡揭陀遍治諸毒）

六論童子病（童子始從胎內至年十六）

七論長年方（長年則延身久存）

八論足身力（足力乃身體强健）

と云へり、若し此を尙明にせんと欲せは寄歸傳解纜抄の第六卷（三十）に修行道地經を引きて說明する所あり披見すべし

佛典中の此醫療部を見るに醫の八術は今日醫學の分科と相對比して着るも差間なかるべし、其治身術は內科と云ふへく、治眼術は眼科と云ふへく特に佛說能淨一切眼疾病陀羅尼經と云へる別經さへあり、其治胎術は產科若くは婦

人科と云ふへく經には迦葉仙人說醫女人經と云へるものあり、又治小兒術は小兒科と云ふへく經には救療小兒疾病陀羅尼經と云へるあり、其治瘡術其治毒術は皮膚病黴毒科とも云ふへくして療痔病經と云へるあり、仝經には療痔病經畧贊と云へる註釋書もありて多少參考と爲すに足らん、其治星術、治邪術は世に所謂狐附狸附犬神死靈とか云へる精神病科に入るへきものならん、是を以て當時の醫術か如何に發達せるかを知るに足るべし

其他小止觀には雜阿含經を引きて七十二の良法ありと云ひ、其手術としては耆婆經にも腦及腹部に對して耆婆が手術を施したる事を說けるが、姉崎博士も亦印度當代の手術としては「スヽラダ」の醫方明論によりて

外科の手術の如き巧妙果斷にして大切斷術をも行ひ裁石術を行ひ內臟、子宮に對しても手術を施し外傷、瘻管、折骨の治療の如きは固より其手術中のものたりしなり、其他鼻の新造の如き第五神經の切斷の如きを行ひしと云へは其進步や思ふへきなり

其他婦人科產科には非常の手術を行ひ、小兒の診斷をも行ひたり

と云へり、以て其進步の狀發達の跡を偲はしむるものあるべし

其外療法の一として閑窓雜錄に西域記と南海寄歸傳とを以て印度の療法には斷食を肝要とする旨を記せるが南海寄歸傳には

醫明傳二干帝釋一、五明一數、五天共遵、其中要者、絕レ食爲レ最、

と云へり、是に由りて之を觀るに絕食は印度の病氣に對する風俗習慣と見て差支なかるへし、予此事を日露戰役從軍中一日昌圖附近の舍衞地に在りて古來の土俗習慣中に含める醫師及衞生に就きて研究せられたる醫學士なる某軍醫に語りしに、其際軍醫は德川家の料理人が長命せし物語をせらる、曰く

昔德川家の料理人長命せり、人あり其長命せし理由を問ふ、料理人曰く常に魚鳥を料理するに短命なる雜鳥は胃中に食滿つるも長命と云はるゝ鶴ゝ何時料理しても胃中食の滿ちたることなし、其事に心附きしより後常に食を少なく取りたるより外に長命の理由なし云云、

然り人の多くは胃腸に惱む、而して食足らずして病むは少なく過食して病むもの多し、眞に口は禍の門か、聞く傳染病の幾許は消化器より傳染すと、されば病は口より入るか、道德上衛生上戒慎すべきは夫れ口なる哉

此外心身相關の理より惑(心病)病(身病)同源論を說くものあり、明治の世となりて宣傳せられたるは原垣山老師の惑病同源論となす、近時東京築地二丁目上宮教會出版部井冽堂より發行せられたる荒木磯天氏著禪學心性實驗錄は故垣山師の惑病同源論を詳述せるものなるを以て醫學者の參考とするに足らん、此說亦古よりありて療法を一に止觀に取る、今飜譯名義集により其說を見るに

治病之法乃有二多途一、擧レ要言レ之不レ出二止觀二種一方便一云何用レ止治レ病相、有師言、但安二心止一在二病處一即能治レ病、所以者何、心是一期、果報之主、譬如下王有二所至一處群賊迸散上、次有師言常止二心足下一莫レ問二行住坐臥一即能治レ病所以者何、人以二四大不調一故多二諸疾患一、此由二心識上緣一故令下四大不調上、若安レ心在レ下四大自然調適衆病除矣、有師言但知二諸法空無一所有一不レ取二病相一、寂然止住多有レ所レ治、所以者何、由二心憶想鼓一二詐四大一故、有レ病生、息レ心和悅、衆病即差、故淨名經曰、何爲二病本一、所謂攀緣、云何斷二攀緣一謂〻心無所得、如是種々、說二用レ止治レ病之相一非レ一、故知善修二止法一、能治二衆病一、次明二觀治レ病者、有師言、但觀二心想一用二六種氣一治病者即是觀能治病、何等六種氣、一吹、二呼、三嘻、四呵、五噓、六嘘云云、

とあり、是れ禪學禪力を以て身病を治するの一法なり、先年佛教大學在學中鎌倉より耳根圓通を以て病根を治せん

と云ふ老人來りて說きたることあるも其說亦此外に出てさりき、勝海舟翁曾つて虎列刺病に襲はれ一室に閉籠り坐禪をなし氣海丹田に力を入れ禪力を以て之を退治せし事あるも亦此一法なり、果して眞理あるや無きやは是れ禪を得し後のこと、千人か千人共得べきの道にあらず、然れゝ醫藥の法によるを、安然にして而も最捷徑となすか、其他西域記には

三曰醫方明、禁呪、閑邪、藥石、針艾、

と云ひ印度醫方の風俗を示せるが、西域記は玄奘三藏が印度を旅行せし時見聞したる風俗を記せるものなれば印度の嶋祠間には禁呪と云ひて我邦の所謂「マジナイ」にて病を治せんとするもあり、又閑邪と云ひ邪念を閑めるを療法とするものあり、又藥石と針灸とを以て治するものありしを見るべし

二　投藥

投藥の事は「病んで醫藥に親しめ」ともあり、「良藥を分別せよ」ともあり、「能く湯藥を經理せよ」ともあり、「衆生あり病を得て醫藥を服せず病を看る人なき爲に死す」ともあり、「醫藥を服せざる時は橫死す」ともありて、即ち藥の必要を說くものなり

其藥は動植鑛物より採りしことを姉崎博士は中央公論に於て示されたるが佛典中にも此事を說く、而して藥の種類としては別に知るに由なきも那先比丘經によれば膏藥と綿絮とを用ひたることを記し、佛陀の福音には時縛伽か佛の病みたる時に藥と浴とを進めたることを記す、姉崎博士は印度當代に於ける戰時の醫術を說ける下天幕を張りて擔架卒の擔き來れる傷兵に對し其出血を止むる止血藥、瘡部に鎭痛の油を滌く鎭痛劑、此に綿絮と膏藥とを用ひたることを記せるが、今日流布する佛典中之を見るに療痔病經畧贊には僧祇律を引きて四百四病の中風大の百一の病に

は油脂を用ひ火大の熱病には蘇を用ひ水大の病には蜜を用ひ雜病に油脂と蘇と蜜と三藥を用ゆとあり、諸經要集及法苑珠林には增一阿含經を引きて

再時世尊告二諸比丘一有二三大患一三何爲レ三、一風爲二大患一二痰爲二大患一三冷爲二大患一、然有二三良藥一治、若風患者、酥爲二良藥一、及酢所レ作飯食、若痰患者、蜜爲二良藥一及蜜所レ作飯食、若冷患者、油爲二良藥一及油所レ作飯食、是謂二三大患一、有二此三藥一治、

とあり、又耆婆經には蘭王の病を耆婆か治せし時には醍醐味を用藥とせりと見ゆ、以て佛典中の醫療に於ける一般を知るべきなり

第十二　佛典中の豫後論

治病後の要心に就ては聖典中屢其名目を示す所あるも何等具體的に說けるものなき故に茲にも亦其項目のみを擧くるに止むることゝなしぬ

別に衛生篇、看護篇あるも餘り長篇にわたるを以て差上げず、又佛敎の屍體觀は自著「軍人心の友」にあるが多少加筆の上其一節を左に錄す

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

偶　言

一、殺人刀兮活人劒とは禪語の一、それ諸子の持する刀は是活人劒？、往年佐藤博士李中堂に對して此を拈す

一、俗に良醫名醫に對して劣者を呼んで藪醫と云ふ、是既に印度に行はれたる語、然し印度に用ひられたる此語は果して劣者を呼ひたる言なるか否やを知らず、梵文に曰く Kabirāj＝藪醫の原書あり

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

○心に活きたる者の屍體觀一節

……又我が五尺の體軀も體軀其物から云へは死んだ時には妻子眷屬親子兄弟眼を泣き腫らし歎き呼ふにしても三日四日は愚か一日二日立たぬ間に親にも子にも女房にも鼻を摘まゝれるではありませぬか、こんなつまらないものはない、之を壽命のある丈捨てゝ置いた處が三十年も五十年も生きられはせぬ、よし尚生き長らへた處で死ぬ時になつて跡ふり返つて見れは夢見た樣なものである、それも必す生きられるかと云へば今宵も分かぬ露の命である、して見ると國家の大事君の御爲め或は人類の爲め社會の爲め公衆の爲め世の爲に命を終ると云ふは人として眞の榮譽であらうと思ふ、願くは聖き教により假令内に死するも心に活きて芽出度國の御用を果し我身の爲すへき事を全ふし未來は靈の生命によりてより清き樂しき新生涯に入る樣致度いものである、若しも此佳境に入られたならば我屍體が如何にあらうとも頓着のない心か起る、今佛教信者の屍體觀の一二を述へて例をせんに、婦人としては嵯峨天皇の皇后なる檀林皇后と申すは非常なる美人で恐れ多くも御生涯誰れ彼れとなく想ひ懸け奉つたなれども寔に婦德正しき御方であつた、而して皇后は篤く佛を信せられたが其崩去の時御遺詔あらせられて「已が屍を西山の林に棄てゝ世の色慾に耽ける者の惑を解かん爲に屍の腐り爛れる姿を見せん」とて四葬の中の林葬の儀を取り給ふた、是れ全く已の屍を以てすら尚世を教化せんとの大慈悲より起りたる時の皇后の御處置である、此に類する例は西洋にもある、伊太利の「ボロンヤ」市に類稀なる美人ありて世人の標的となり天下の視線を集注せしが青春燃ゆる如き今を盛を名殘としてあわれ北邙一片の土となつた、彼れ其死に臨み「今迄幾多才人の心を惱まし天下の耳目を聳動せしは唯此肉體の美に因れるのみ、イデヤ此理を世の淺墓なる人々に知らせんと云ひて死後解剖せる骨を集めて公衆の觀覽に供し一は已か美を誇れる少女を戒め一は姿の美に心を迷はさんとする青年に其愚を示すべし」と遺言して逝けりとのことである、共に味ふべき好乎の戒ではあるまいか、それから眞宗の開山親鸞上人は御臨終の際「我死せば屍體を加茂川に流せよ」との命を遺された、此遺言から見ても立派な葬式をして吳れの屍體を大切にせよとの御思召は全く無い、又蓮如上人は一休和尚と年は一休和尚の方が非常の年上であつたにも係らず信仰の上には無二の心友であつた、處が一休和尚か酬恩院でなくなる時此一休の體の葬式は誰てもするが一休の滿足の出來る

樣に心の葬式をして吳れる坊さんは眞宗の蓮如より外にないから蓮如に引導を渡して貰つて吳れと云つて死なれた、すると一休の高弟が本願寺へ來て蓮如上人に其旨を傳へると上人は「已は活きた一休に活きた引導を渡して置いたから死んだ屍體に要事はない勝手に葬式せよ」と云つて突き戻されたと云ふことである、此も心に活るを云ふは大切であるが屍體は誠に輕ろく見た話である、すると蓮如上人をかくまでの親しい中でありながら無情な人だと思ふ人があるかも知れぬが、私に申させると蓮如上人は此の如き返事をする位の腹のある方だから一休が斯く云ふたのであり又一休和尚は弟子が突き戻されて來たので却て喜んで居られるだらうと思ふ、尙一休和尚に就てはかつて愛禪をした女がある其は泉州堺の妓で地獄太夫と云ふ女であるが仲々悟道は達者なものであつたと云ふ、其地獄太夫の信仰を述へた歌に「我死せば燒くな埋めな野にすてゝ痩せたる犬の腹を肥やせと」と讀んで一休和尚に見せると一休はまだ〳〵いかぬかうやれ〳〵と云ふて「我死せば燒こと埋もと野に棄てよと痩せたる犬の腹を肥やそと」と作りかへられたが、之は自分の屍體だと思ふ執着がまだあるから「痩せたる犬の腹を肥やせと」と注文をするのである、生きて居つてさへ執着してゐらぬのに死んだ屍體まで執着してはいけぬどうでもするか儘にして置くが善いと作り替にないたのである、彼の日蓮上人でも自分の死んだ死骸が何ずの用に立つ樣なら八つ裂きに裂いても苦しくない肥にでもなればするが善いとの事であつた、又彼の太田道灌が上杉定正に欺かれ御馳走に呼ばれ酒に醉ふて湯に入つて居る處を定正が刺客に刺し殺さした、すると道灌は顏色も變へず湯の中で創口を抑へて「昨日までも妄執を入れたきしへんなし袋やぶりけむ」と歌をよんで致なくなつた、此等の例話によりて考察して見るに若し吾々が一朝死の運命に達せば死んだ當座こそ親子兄弟夫婦は涙を流し眼を腫らして泣いて吳れても一両日立つか立たぬに此涙を流して吳れた人眼を腫らして吳れた人より鼻を摘まんで臭い〳〵と云はれる樣な此體軀である、此の體軀、此の臭皮袋、此の世話袋、此の痴肉欒、此のへんなし袋が或は國家の爲に戰場の露となり或は解剖されて醫學界に貢獻する處あれば生前死後に渡り誠に滿足すへきことではあるまいか、生きて居る間でさへ是れゞと云ふ世の爲め人の爲になる仕事を得せないんだ者が其死んだ體が將來幾億の生靈の身の上に起る病を救ふの料となると思へば此に上越す事はなからうと思ふ、實に心に活き靈に活きたる上は死後此體が何處でどうならうとも一向頓着せない筈である、殊に仁を旨とし日夜醫道に從ほるゝ方には一層此事を適切に感じられ萬難を排して死後解剖臺上の人たらんと欲せらるゝ事と思ふ……

醫學博士　緒方正清先生著

富山縣奇病論

菊版洋裝美本紙數六百余頁　地圖　寫眞版　模型顯微鏡諸圖

レンドゲン畫譜等　數十枚

正價金貳圓八拾錢
郵稅金拾貳錢

佝僂病及骨軟化病ハ從來本邦ニ於テ殆ンド絶無ト信ゼラレシニ彼ノ所謂富山縣奇病ナル者ハ田代、木下、三輪、緒方、諸博士ノ研究ニヨリ全ク該病タルヿヲ確認セラルヽニ至レリ殊ニ緒方博士ハ數回彼地ヲ踏査シ多數ノ患者ヲ収容シテ長日月間遺憾ナク各方面ニ渉レル學術的研鑽ヲ遂ゲ以テ今回其顚末ヲ公ニセリ抑モ本書ハ該病蔓延ノ狀況發見ノ由來患者ノ統計、經過、轉歸、原因、骨盤ノ特徵機械的作用、レントゲン撮影、本態論、豫防及治療法等各部門ニ渉リ著者ガ心血ヲ注ギタル研究的結果ヲ根據トシテ歐洲諸大家ノ嶄新ナル學說ヲ參照シ最モ卓越ナル論議ヲ詳述セリ就中本態論ハ田代、木下、両博士ノ意見ト符合シ病理學ノ大家山極博士モ亦一論文ヲ東京醫學會雜誌ニ草シ著者ノ議論ニ贊セルアリ今ヤ各地方類似ノ疾病ヲ發見スルノ秋ニ會シ本邦未ダ本病ニ關スルノ著書ナシ世上好學ノ士迅ニ本書ヲ繙キ其眞價ヲ味ハレンヿヲ

發賣所　東京　大阪　丸善株式會社書店

醫學博士三浦謹之助序　醫學士佐藤恒丸譯

博士シヤルコー　神經病臨牀講義

前編上卷下卷既刊　後編追而發行

全三冊

クロース仕立美裝四百余頁

各冊壹圓六拾錢

小包料各拾貳錢

台灣清韓參拾錢

世ノ開明ニ伴ヒテ精神及神經ノ病彌多ク此等ノ疾病ヲ研究スルノ必要ハ彌增加ス然ルニ近來我國ニ於テ精神病ニ關スル著書續々世ニ出デタルニ拘ラズ獨リ神經病ニ關スル著書ニ至リテハ殆ド一モ聽ク所ナシ本書ハ神經病學ノ泰斗タル佛國シアルコー博士ノ臨床講義ヲ譯出シタルモノニシテ器質的及官能的ノ凡ユル疾患ヲ網羅シ博士ガ獨特ノ精細ナル觀察ト巧妙ナル講演トヲ其儘ニ平易ノ文體ニ表ハシタルモノナレバ讀ムモノハ神經病ニ關スル教科書以上ノ詳細ノ知識ヲ得且臨床講義ハ如何ニ爲スベキモノナルカヲ學ブト同時ニ讀ミ物トシテ亦少カラザル趣味ヲ感ズベク實ニ深遠ノ學理ヲ面白ク味ハシムルハ本書ノ特色ナリ加之譯者ハ本書ノ飜譯ニ（明治三十三年以來）滿六箇年ヲ費シタルモノニシテ成ルニ從ヒテ逐次之ヲ東京醫事新誌上ニ登載シタレバ其飜譯書トシテノ價値モ亦原書ヲ對照シタル人ノ既ニ熟知スル所ナリ、世ノ醫師及醫學生諸君速ニ一本ヲ購フテ此言ノ虛ナラザルヲ知リタマヘ、

發行所　東京市京橋區南小田原町四ノ五　東京醫事新誌局

實地醫家唯一の好侶伴

臨牀藥石新報

月刊　一冊金拾錢五厘　郵税共　六冊前金五拾八錢　拾二冊前金壹圓拾錢

本誌は臨牀上新舊藥物の應用を記載せるものにして藥業家の機關或は廣告を主眼とせるものとは其趣きを異にし記事は學術の進歩に伴ひ、材料は弘く内外を集めて實地醫家の伴侶たらんとを期す從て其欄を「新報」、「質疑應答」、「方府」、「纂抄」、「抄錄」等に分ち、殊に本年九月より纂抄欄には隨時讀者諸君の請に應して一種の疾病につき内外の諸報告を蒐集することなし、先づ流行性腦脊髓膜炎療法を掲ぐ、十月の分には「腸チフス」を載すべし

見本　御望の方は往復はがきを以て御申込あれば直に送呈すべし、但し號數指定は御斷り申候

東京市本郷區向岡彌生町三番地

發行所　藥石新報社

第二十七回産科婦人科學講習

科目　産科手術學及婦人科診斷學

時日　十月一日より十一月三十日まで

資格　醫術開業免狀所有者

右廣告す

規則書御望の人は郵税二錢御送りのこと

東京市日本橋區濱町三丁目七番地

産科婦人科　**楠田病院教室**

○消化機病學第四回講習

（講習期）自明治四十年十月一日至明治四十年十二月二十日

（講習生）參拾五名募集

右講習生ヲ募集ス

東京市麹町區內幸町一丁目三番地

胃腸病院

（電話新橋百六十八番）

金澤醫學專門學校 十全會會則摘要

（明治三十八年五月改正ス）

一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ緣故アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ緣故アル者ヲ贊助會員トス

本校職員卒業生及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス

一本會ニ講話部、雜誌部、學術實習部、ロンテニス部、劍道部、柔道部及弓術部ノ七部ヲ置ク

一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス

本校職員タル特別會員（校內特別會員）ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附スベキモノトス

本校卒業生タル特別會員（校外特別會員）ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金參圓ヲ納ムル者ハ五ケ年ヲ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス

將來卒業ノ特別會員ハ最終授業料納付ノ節必ス一時ニ三ケ年間ノ會費金參圓ヲ納ムベシ

通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓八拾錢ヲ納ムベシ

特別會員ニシテ引續キ三ケ年間會費未納者ハ除名ノ上一般會員ニ通告ス

一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ八月ニ終ル

一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シテ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講談會ヲ開ク

講話部ニ於テハ特ニ語學會ヲ開クコアリ

一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ

雜誌部ニ於テハ本會所屬ノ圖書ヲ管理ス

一學術實習部ニ於テハ專ラ小野慈善院ノ患者ニ就キ診察治療ヲナシ學生ヲシテ臨床實習及調劑實習ヲナサシム

（運動部規定ニ關スル規定摘要ハ畧ス）

▲投稿者心得七則▼

一投稿用紙は中折紙を用ゐ必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記入せらるべし

一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て沒書とす

一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし

一言の政治に涉り或は德義に背くものは一切登載せず

一未完の原稿は採錄せず

一原稿採否の權は編輯長にあり

一一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治四十年十一月十二日印刷
明治四十年十一月十六日發行

編輯兼發行者　石川縣金澤市池田町二番丁廿一番地　山本兵三郎

印刷者　石川縣金澤市尾張町八十二番地　宇野孝太郎

印刷所　同所　活文堂　【電話六十五番】

發行所　金澤醫學專門學校十全會